女子高生
XL
されたい

第一章《女勇者　フレア・マナ・アース》

私の名前はフレア・マナ・アース史上最強の女勇者。魔王ですら恐れ、畏怖する存在だ。
ていうか、あんなやつ片手でも余裕で倒せる。
けれど、世界では未だに人間と魔族の対立は続いていた。

それは何故か――私に殺る気がないからだよ。

だって魔王を倒すために幼い頃から厳しい修行をさせられ、戦って、戦って、戦い抜いた先にあるものが孤独だったんだもん。
パーティーのメンバーだって、私を怒らせたら殺されるーなんて思ってるもんだから気を遣いっぱなしだし。
そりゃあ殺る気もなくなりますよ。もーやだやだ。

しかも、こんな世の中だというのに人間は未だ雌雄で格差がある世界。
所謂、男尊女卑というもので美少女である私が最強ということに関して髭面のジジイ共は、まーもー眉間にシワを寄せていることだろう。
魔王がいなくなった途端に暗殺命令だの、もしかしたら政治的策略で裏切り者扱いされ正面堂々と戦いになるかも知れない。
幾度となく魔族と戦ってきた私でも、流石に人間相手だと殺した時後味悪いから嫌だ。

だから、私はこーやって魔族と人間の力の拮抗を維持しつつ一人気楽な旅を続けていたの。
特に目的も無く、ただブラブラ～と転移魔法を駆使しながら様々な街を散策した。
そんな中、ある時聞いた噂話が久しぶりに私の興味を惹きつける。

「女を卑猥にさせる迷宮《ダンジョン》がある」

街の住民曰く地下何階層にも続く迷宮が付近に存在し、最終地点には魔王すらも凌駕することができる伝説の剣があるとかないとか。
当然、王国は大量の兵隊を送り攻略を目指したが失敗に終わった。
命辛々逃げ出した兵士達は女ばかりで、しかも帰ってきた時には酷く錯乱しており、性行為を過剰に求める者や、正気になった思えば再び迷宮に戻ることを望む者ばかりだったという。

私は直感した――これは絶対にエッチな事をされたんだ、と。

つまるところ、思春期真っ盛り性交経験皆無の私が興味を持つ事は至極当然の理《ことわり》。
エッチな事を経験したいと願うのは、年代的に普通の感性と言えよう。
だが、敢えて自分から言うが、胸も有り、顔も良し、スタイルも抜群の赤髪美少女なのだが、難関ダンジョンを攻略しようとする挑戦的な雄でさえ、私を攻略しようとはしない。

だったらもう……そこに行ってみるっきゃないでしょう！

サキュバス？　ゴブリン？　どんと来い。
お前ら何ぞ、私が本気を出せば小指一本で爆破四散じゃ馬鹿野郎。
いざとなれば攻略することは容易、身体から溢れ出る性欲《リビドー》は抑えきれない。
どちゃくそに凌辱されてーんだよ私は。ドMなの、本当は。

第二章《スライム姦》

と言うことで、やってきました噂の迷宮。
うん、入り口は至って普通のダンジョンって感じだね。
木々の根本に石で出来た階段があり、暗闇の中へと続いている。
人一人入れるか程度の狭い通路で、大勢で攻略するには不向きな場所だと直ぐに理解した。
王国の上層部は実物も見ずに命令を下したな？　やれやれ、これだから魔族にしてやられるんだよ全く。

「さて、では早速……あぁ、そうだ。念の為、念の為っと」

魔力装甲《エンチャント》、オン。自動回復《オートライフ》、オン。
後は、勘の鋭い魔族に勇者だとバレないようにする為に、魔力制御《ブレーキ》もオン。勿論、自動攻撃《オートファイア》はオフ。
これで即死技でも食らわない限りは、それなりに愉しむことが出来るだろう。

「んよし、ではー久しぶりの迷宮《ダンジョン》攻略にぃ～ぁ、レッツラゴー」

ガサッと落ち葉を踏み締めながら、階段を降っていく。
魔力制御をしているせいで、暗闇が見えないから右上に小さな火の玉を作り出し松明《たいまつ》代わりにした。
そうして暫く進んでいくと、少し広い円形の空間へと到着する。

「むむ、これは……」

淵の方へ寄せ集められた哀れな骸骨達。

食べられてしまった人間は、キチンと纏められてさぞ幸せだろう。
どうやらここが第一階層みたいだ。少しだけ、肌に魔力を感じとることができる。
鬼が出るか蛇が出るか。なんて、ワクワクを膨らませている時だった。

「――ッ、冷たぁ！」

天井から液体が落ちてきて、つむじにポチャンと当たったみたいだ。
顔に沿って流れてくるそれを、指で触ってみると少しだけ痺れを感じた。
水、というより粘膜、粘り気のある液体。毒性は微量。つまり、これは。

「犯人は君か――うぉわ！？」

視線を上に上げようとした瞬間、巨大な水滴が落ちてきて体を包み込む。
迷宮の中なのに、水中にいるかのような感覚。水色の粘膜の塊。
シュワシュワと音を鳴らしながら、おにゅーの服が溶けていく。
そう、私は巨大なスライムに襲われたのだ。

「ごぽ、ごぽぽぽ」

呼吸はできる。スライムの身体はただの液体では無い。
形状を維持する為の魔力膜《はだ》が身体全体を囲っており、中身の成分は未だ解明されていないが、人間を溶かし補食することから「酸」ではないかと言われている。
いやはや、乙女の服を早速溶かし地肌を露わにさせるとは中々に鬼畜よ。

肌もピリピリと焼けるような痛みが走っている。
もう少し魔力装甲《エンチャント》を強めようか？　ん～でも、このピリピリが若干気持ちいいかもしれない。

「ごぽぽぽ……ごぽ」

しかし、退屈だ。このままジワジワと溶かしていき、私を栄養にするつもりだろうが出ようと思えばいつでも出れる。
求めるものはエロと凌辱、補食される筋合いはない。
雑兵と勘違いして私を襲ったのが運の尽きだったようだな。

「ごぽぉー」

頭の中で魔力の回路を入れ替え、心の中で詠唱を始める。
さらば、スライムくん（ちゃん？）。君の出番は５分も無かったよ。と、その時だった。

「――ッふあ！♡」

頭の中に快楽の電流が走る。
もぞもぞと水中を蠢く何かが、私の乳首を刺激したのだ。
それと同時に、スライムの色が薄い水色からピンクへと変色した。
まさかコイツ、雄と雌を判別しているの――かァ！♡

「ご、ぽぁ！　ぁ、ああ！♡」

乳首を両サイドから指の様な物で挟まれ、クリクリとこねくり回される。
口からは酸素の気泡と共に甘美の声が漏れた。
魔力膜が体内でも形成され、形を作っている。しかも、生殖器官ではなく明らかに私を雌として興奮させようとしていた。

間違いない……これは――凌辱の気配！

「んッ……んく、ぁ！♡」

身体をビクンと跳ねらせると、スライムは更に強く私の乳首を抓った。
まるで、乳搾りでもするかのようにギュッと摘み伸ばされる。
奴の体内で足をジタバタさせても意味はない。完全に捕らえられてしまっているのだから。

「ぁ、んんッ――んごぽぁ！♡」

急に酸素が薄くなり、苦しみ悶えると同時に乳首へと攻撃は激しさを増した。
快感と苦しみを融合させるつもりだろう。
だが、無駄無駄。元より私はスーパードM、この程度の苦痛ではまだまだ足りない。
最も激しく犯して欲しい……よし、ちょいとばかし暴れてみるか。

「んぼッ！　ぼぼぼぉ！♡」

軽く体内で爆裂魔法を発動させてみる。
ボンッと音を立て、小さな爆発が起こす。

スライムの弱点は火。水が蒸発するのと同じように身体からは蒸気が発生した。
すると、奴の行動パターンは一変する。

「ふごッ！　お゛おごぉ゛ッ！！♡」

空気は一切失われ、指のような形をしていた部位は太い丸太のように変わり腹部をドスドスと殴り始めた。
そして、更に苦痛を与える為、長い軟骨のような水が口の中へと流れ込む。

「お゛お゛！♡　お゛お゛ッ！♡」

イラマチオをされるとこんな感じになるのだろうか。必死に酸素を求めて絞る喉は、奴のモノを吸い込んでいく。
口の中を侵されたまま、腹パンを食らい、くの字に身体が畝る。
このまま殺してから安全に食うつもりか？　いや、違う。
下腹部に新しい違和感を感じた。腹部を叩く棒よりも、少し小さめに纏まった膨らみのある棒。

「お――ぁ……おぁ♡」

腹部の痛み、命の危機、そんな小さなことよりも未開発マンコに当てられた棒が私の好奇心を掻き立てる。
遂にこの時が来たのだ。切望していた願いを叶える瞬間が。
さぁ、早く私の処女膜を打ち破り快楽と堕落の沼へと沈めてくれ。

「……ジュル」

その想いが通じたのか、擬似肉棒は一切の容赦もなくピッタリと閉じたマンコに突き刺された。

「――ッ、んあああ゛♡♡♡」

ズブ、スブブブブ。

内側から押し上げられる内臓。潰される子宮に、強制的に拡げられた膣口。

凄まじい異物感と圧迫感に襲われ、胃袋に溜まっていた物を吐き出しそうになる。

が、上の口も、下の口もスライムの軟骨で塞がれ逃げ道はない。擬似的な串刺状態だ。

処女膜が破れ多少の痛みが走るが、こんな物オークと初めて戦い腕が千切れた時に比べれば軽い物。

「ぁ……ぁ゛ぼ！♡」

これだ、これ。私が求めていたものは。

今の私はスライムの気紛れで生きている哀れな雌でしかない。

その気になれば、内臓を貫き、内側から身体を貫くことだってできるだろう。

勇者が下級魔族の手の平で転がされ、性の捌け口としての利用価値しか与えられぬシチュエーション。人、それを最高と言う。

さぁ、もっと、もっと私を雑に嬲り、肉穴として犯してくれ。

「お゛ッ――お゛ごッ！　お゛、うぼごァ！♡♡」

突き刺した棒は激しく上下にストロークを始めた。

膣を貪るように、奥へ、奥へと突き刺さる。

それと同時に喉に刺さった棒も動き始め、上と下から挟み込まれる。

背を反らせ悶える私の姿を愉しんでいるのか、反応を見せると腹部をバシンと叩かれた。
怒涛の勢いで襲いかかる快楽の大波に抗うことはできず、そして僅かに与えられる酸素により自決することもできず、ただスライムの欲望のままに膣の掻き乱された。

「おごッ！　お゛――ぉ゛ぇ！♡♡」

最早、美少女の面影など遠に失われている。
醜く獣のように喘ぎ、どちらの口も大きく開き、必死に生にしがみつく姿。
はたして、今の私を客観的に見た人はどう思うだろうか。

助けなきゃ？　助けなくていい。
哀れだ？　いいや、幸福絶頂だ。

感じた事の無い体験に、心は悦び続けている。
継続的に流れてくる電流は、自分の意思で止めることはできない。
支配される快感。ドMに生まれて心底良かったと思う。

「あ、ごあ゛ッ！　お゛、おおおおお゛お゛！♡」

ズボズボと子宮が押し潰される度に吠え、その声は体内で反響した。
粘液が肌を、クリトリスを刺激し、感覚が表面に浮かび上がっているかのようだ。
スライムはしばらく私が悶える姿を楽しむと、不意に動きを止めた。
何故？　私はまだ満足していないのに――ッ♡

「お゛……おごご……♡」

違う。やめたわけじゃない。止めを刺しに来たのだ。
既にマンコはギチギチにコイツの疑似ちんぽを締め付けている。
けれど、更に疑似ちんぽは膣内で膨らみ始めたのだ。
内側から膣を拡張され、内臓はちんぽに居場所を奪われていく。
スライム専用の身体へと変えられていっている。
間違いない、コイツは私を孕ませる気だ。
それに気が付いた時、私の子宮はきゅんきゅんと悦んだ。

「お゛――おごぉぉぉぉお゛お゛お゛ッ！！♡♡」

パンパンパンッ。水中で激しく響く破裂音。
お腹が変形するほどに、逞しいちんぽは膣を乱暴に貫いた。
ずりゅっと一気に抜き抜かれ腰を引くと、次は一気に挿し込まれる。
根元にあった膨らみは、徐々に先端へと移動していき発射態勢に。

あぁ、ダメ。このままじゃ私、スライムの孕み袋になっちゃう♡
人間を救う最後の砦なのに、快楽に沈んじゃう！♡
下級魔族のちんぽに屈して、残りの生涯を肉便器として消費するんだ……えへへ♡

体液にまみれ身も心もスライムの物になった自分を想像すると、何かが湧き上がってきた。

週９で自慰行為に勤しむ私には、これが絶頂だという事は容易に理解できる。
けど、全く形質が異なっていた。
自分でするのと、他者に逝かされる違い。
ちんぽでゴリゴリに膣を抉られ、強制的に雄の形に身体を変えられた末の絶頂。
当然、イク深度が変わってくるのだ。

「おおおお゛ッ！♡　お゛、おおお゛ッ！♡♡♡」

頭の中には「もっと、めちゃめちゃに」「もっと激しく」「もっと壊して」という思考しか残っていない。
膨らみが先端部へと到達した時、私も限界を迎えていた。
スライムは、より深くに種を植え付けようと更に激しく膣を抉る。

もう、彼の物になるッ、好き放題に犯され、使えなくなったら捨てられる
ダメなのに、こんなのダメなことだってわかってるのに。
雄に屈する事が雌の幸せだって知ったら、もう戻れるわけないじゃない！♡♡
ぁ……堕ちる……スライムの肉便器に堕ちちゃう――ぃ。

「イグゥゥぅ゛ッッ！！！！♡♡♡」

マンコを前に大きく突出し、絶叫しながら絶叫した。
最大まで高められた快楽は脳の思考回路を焼きつくし、ちんぽの事しか考えられない馬鹿にする。

あぁ、私、完全に堕ちちゃった……♡

スライムの精子注がれて、下級魔族以下の肉壺に堕落しちゃった……♡

――筈だった。けど、私の子宮には何も注がれなかった。

「ぁ、ひぃ♡　……あ、あれ？」

「ぐぎゅぅぅぅ……」

何と、私の処女を奪い、苗床にしようとした殿方は魔力膜《はだ》を失い地面へと溶けていってしまったのだ。
もう、硬いちんぽも、乳首を弄る軟骨も存在しない。
そこに出来たのはピンク色の大きな水たまりだった。

「……ぁ、やっちゃったわ。これ」

冷静になり、状況を整理すると次第になにが起こったか把握できた。
絶頂の瞬間、私は無意識に魔力制御《ブレーキ》を解いていたのだ。
決して攻撃の意思があったわけじゃない。
けれど、スライムというのは人の血や肉、そして魔力を餌にする魔族。
つまるところ、女勇者である私の超ド級魔力を喰らってしまい、過剰供給による魔力暴走《オーバーヒート》で自壊してしまったのだ。

「な、なんか、すまんなスライム君。なかなか気持ちよかったぞ」

無残な姿になったスライムに祈りを捧げ、私は立ち上がった。
もう彼は過去の雄。せっかく超絶美少女の私を肉便器にする機会があったというのに、死んでしまうとは情けない。
下級魔族ではダメだ。もっとタフで、もっと乱暴に犯してくれる奴じゃないと。
指をパチンと弾き、服を再生させる。
脱衣もエロの重要点、行為が終わればちゃんと着る。
全裸でダンジョンを歩くような変態ではないからだ。

「気を取り直して……さ、これで終わりなんて言うなよエロダンジョンッ！」

私は、更なる猛者を求め迷宮の更に奥へと足を踏み入れて行った。